

で四十八・七％(十一月だけでは四十三・三％)へと年々ダウンしています。また総販売戸数累計は前年同期二万六百七戸を十二・四％(二千五百五十五戸)しのぐ二万三千百六十二戸になっています。この総販売戸数は五十三年同期や五十四年同期に次ぐ史上三番目の販売戸数となり、今後の市場見通しに明るい材料と住宅不況であってもマンション不況に非ずという見方も成り立つのです。

次に十一月末現在の分譲中戸数(売れ残り)を見ますと、十一月中に二千七百十一戸もの総販売があったにもかかわらず、十一月末には前月末より更に増えまして、約一万二千戸の売れ残り、史上最高の数字に達しました。そのうちの完成在庫は三千九百六十五戸で、五十五年までは一千二百～一千三百戸であったのが五十六年に入ると急増し、依然増え続けています。

マンションがどんどん建っておりますが、修繕用積立を十分していないマンションが多く、そのことは居住者に決してプラスではありません。十二分に注意していただきたいと思えます。

来年のマンション業界は膨大な在庫をかかえ、おそらくその消化に努力されると思います。また住宅業界の不振もまだまだ続くと思われまます。

どうもご静聴ありがとうございます。

谷崎潤一郎の阪神間転居(前編)

西宮ロータリークラブ例会 一九八二・八・十七

去る七月二十二日、作家佐藤春夫の未亡人千代さんが八十五歳の生涯を終えました。千代さんは作家谷崎潤一郎の最初の夫人だった方です。また最近谷崎松子未亡人から頂いたお手紙では、小説「細雪」の四人姉妹の一番上の姉「鶴子」のモデルとなった森田朝子さんが危篤ということ。七月三十日は潤一郎の十八回忌の詳月命日でした。それで、今日は谷崎潤一郎が阪神間のあちこちに住んでいた頃のことには焦点を当てて、私が研究しました範囲でお話ししたいと思います。

谷崎潤一郎は明治十九年(一八八六年)七月二十四日東京日本橋で生まれましたが、若い頃から転々と住所を変えていました。大正十二年九月一日の関東大震災に箱根で遭った潤一郎(満三七歳)は、瓦礫の街と化した東京や横浜に見切りをつけて、千代夫人と長女鮎子を連れて船で九月二十日神戸に着き、しばらく京都の寺で暮らしました。(○内の番号はP.20～21略図参照)

① 十二月になって苦楽園の万象館に落着きました。京都の寺が底冷えして鮎子の健康に良くな

いので、仕事のため苦楽園の六甲ホテルに逗留したことのある潤一郎は、温暖で閑静な苦楽園が気に入っていたようです。当時の苦楽園は、大正二年にラジウム鉱泉が発見されてから多くの旅館、ホテルが出来て賑わっていました。大社村越木岩字山椒ヶ原が正式地名ですが、その頃は「苦楽園」の頭に「六甲」を付けて「六甲苦楽園」と呼んでいたようです。潤一郎は、或る朝共同温泉へ入った時、他の客からジロジロ見られたり、ヒソヒソ話をされて気味悪かったと「阪神見聞録」に書いています。現在の苦楽園バス停から三笑橋を渡り、右へ少し入った所にあつた万象館跡は、苦楽園四番町六一八の田野郎に当たり（八木会員のお宅の近く）、その豪壮な石垣が万象館の名残りとなりました。その向かいにあつた六甲ホテルや、三笑橋東側の共同温泉の跡は残っていません。苦楽園での生活は、翌大正十三年三月までの約三カ月で終りました。

② 次に本山村北畑二四九番地の一に転居しました。阪急岡本駅から水道路を東へ約三百メートル本山第一小学校（鮎子が通学）の東隣の四角い地面（地主は小林さん）に建つ二軒を家主の多田さんから借りていました。水道路から五、六段のコンクリートの階段を上ると、西側に四角の平屋でスレート葺の、南向きのベランダがある緑色のクリスマスケーキのような可愛い洋館

という方は現存していませんが、その奥にあるもう一方の洋館平屋建は洋間三室と台所で、今もほぼ当時のまま、小林さんの貸家として健在です。現在の住居表示では本山北町三丁目九十一です。谷崎は家族らと生活の場として道路側の家を、そして客間と書齋用にも奥の家を使い分けていました。この書齋で「痴人の愛」の大部分が執筆されました。谷崎は小田原在住の大正八年頃、世話女房タイプの千代夫人と別れて千代に同情する佐藤春夫に委ねることにし、わがままでイキイキした千代の妹せい子に心ひかれて結婚する寸前まで行き中止します。それ以来、佐藤と谷崎は絶交状態になりました。大正十年のことです。このせい子が「痴人の愛」のナオミのモデルです。大正十五年十月、佐藤から谷崎への手紙をきっかけに、五年間の絶交に終止符が打たれます。この北畑戸政の家には約二年八カ月ほどいて、「今少し広い家へ移転する予定」として、大正十五年十一月頃、次の好文園へ移ります。

③④ 好文園というのは、阪急岡本駅から甲南大学生が通る細い道を西へ約二百メートル、天上川の手前を北へ栄田橋を渡った西側一帯で、正式には本山村栄田二五九番地、現在は岡本七丁目二番と六番にまたがった所です。好文園は伊藤萬商店の専務取締役であつた故伊藤萬治郎氏個人の経営による賃貸住宅地の通称で、萬治郎氏が至って謡曲が好きで、岡本が梅の名所で

あるのに因んで、「老松」の一節「梅は好文木」から名付けられました。今も銅板製の「好文園」の標識が塀に埋め込まれて、ひっそりと残っています。ここはテニスコートや梅、桜、泉水などを中心にして、大小十何軒かの家々が整然とまとまり、管理の行届いた高級住宅地でした。谷崎はその二号に最初移りました。天上川の次の阪急ガードを越して北へ上った所であり、二階建て下が四部屋に台所、二階の洋間が書斎でした。上海から帰ったばかりの谷崎は、中国趣味が加わって、机もイスも竹細工だったといえます。その後、好文園内でもう少し狭い家に移ったのですが、それが何号かはどの文献にも明記してありません。私の調べでは、テニスコート寄りの四号ではないかと思っています。昭和十三年、好文園は水害に遭った後、区画整理で、家の移転、撤去を余儀なくされました。二号も四号も現存していません。その頃、谷崎は仕事部屋として梅林の近くに農家の一部屋を借りていました。ところで、好文園時代の昭和二年、芥川龍之介との間で文学論争が始まり、その年の七月二十四日、芥川は自殺します。この日は谷崎の誕生日でもありました。一方、その年の三月、芥川の来阪時、谷崎は芥川を介して初めて根津松子夫人、のちの谷崎松子夫人と運命的な出会いをしています。

- ⑤ その頃、円本時代の到来で、多額の印税がはいったので、谷崎は仕事部屋に借りていた梅ヶ谷の四百五十坪の農家を昭和三年に買取って転居したあと別棟を増築しました。この別棟は、白壁で書院造りと呼ばれ、また中国風でもある変わった建物で、この時期の谷崎の美意識や、まだ関西を理解していないことを表しているようです。梅ヶ谷の家は好文園からほぼ北に当る山麓にあり、北側の塀に沿って背谷川が流れています。岡本梅ヶ谷一〇五五、一〇五六番地です。谷崎はここで引続き「己」を執筆したほか「蓼喰ふ蟲」や「乱菊物語」など数多くの作品を発表しました。「己」「蓼喰ふ蟲」は上方文化への傾倒と讚美が強く表れた作品で、谷崎のその後、の古典的題材への転換が見られます。この「蓼喰ふ蟲」は梅ヶ谷の家らしい描写をバックに、谷崎と千代夫人、佐藤春夫の間柄を作品の上に巧みに投影したものといえます。事實は小説に追隨する格好で、昭和五年春に佐藤夫妻の離婚成立を機に話が進展し、遂に谷崎、佐藤、千代の三人連名で「我等三人此度合議を以て千代は潤一郎と離別致し、春夫と結婚致す事と相成り云々」という有名な挨拶状を知人に送りました。この手紙は昭和五年八月十八日（今から五十二年前の明日）の消印で、翌十九日の朝刊各紙は大きくこの事件を報じ、社会的反響は大変だったようです。谷崎四十五歳、佐藤三十九歳、千代三十五歳でした。この家で谷崎は地唄の稽古に精を出し始めます。

翌六年一月に谷崎は上京して文芸春秋勤務で「婦人サロン」の編集者古川丁未子(数え年二十五歳)と婚約しました。彼女が学生時分に潤一郎の女性秘書と梅ヶ谷の家を訪問したのが知合った最初でした。四月にこの家で結婚式を挙げた頃、谷崎は負債と税金滞納で家を手放す決心をし、差押え逃れのため家具類は親しい妹尾宅に移して、ガランドウ同然の状態だったといひます。そこで五月から九月まで丁未子夫人と高野山の泰雲院に滞在しますが、炊事もロクに出来ぬ新妻に弱り果てた様子です。高野山では「盲目物語」を執筆していますが、翌年九月に根津松子夫人宛の手紙に「実は去年の「盲目物語」なども始終あなた様の事を念頭に置き自分は盲目の按摩のつもりで書きました」と告白しているのです。

昭和六年九月下旬、谷崎と丁未子夫妻は高野山を下りて根津松子夫人の口ききで、一旦河内孔舎衛村の根津商店寮に落着きました。間もなく、その年の暮に梅ヶ谷の家が三万円円で売れました。買手は文箭郡次郎氏で、文箭氏は古い母屋をとりこわし、新しい二階建を建て、門を東から西へ付替えたりしましたが、谷崎が建てた書院造りの別棟の方は、水害にも流されず健在です。戦後小澤逞夫会員がしばらくお住まいになったそうですが、米人でカナディアン・アカデミーの先生クリセル夫妻が昭和四十二年からずっと借りて住んでいます。先日見学に伺いま

すと、内部は谷崎時代の物は残っていませんが、書齋だった二階の北向きの部屋などは当時の趣きがそのまま残っており、屋根瓦や白い壁、観音開きの扉など建物の外観はクーラーが取付けられている以外ビクともしていないように見受けました。現住居表示は岡本七丁目十三一八です。

⑥ 昭和六年十一月上旬には河内の根津商店寮から今度は夙川、当時は大杜村森具北連毛八四七番地一一〇にある根津家の別荘内の二階建別棟に世話になることになりました。洋間が殆どの母屋には、すでに根津家の家族も大阪から引越して来ていました。ところで、根津家は大阪の長者番付の上位を占める綿布問屋でしたが、主人清太郎氏は相当遊び好きで次第に家運が傾き、その上、松子夫人の末妹との仲が世間に知れてきました。清太郎、松子夫婦は外見だけの夫婦で別居同様の状態だったわけで、一方母屋と離れという同じ屋敷内で生活するようになった谷崎と松子夫人とのつき合いの度合いは急速に深まって行ったようです。

その年の十二月十五日に、根津邸内より妹尾氏宛に出された手紙に、初めて谷崎は自分の署名の代りに「倚松庵主人」という号を用いています。邸内に松が幾株かあったにしても、松子夫人の「松」に「倚」という意味深長にして粹な号を名乗ったわけです。翌七年二月上旬、

谷崎潤一郎、丁未子夫妻は魚崎へ引越した直後に根津別荘は人手に渡り、その後回り回って跡地は伊藤忠商事の所有となり、会社関係者の三人の希望者に三分割されました。両端は家が建ち、真中はまだ空地です。住居表示では西宮市相生町十二番十四号と十六号に当たります。

(衣笠和夫会員のお近くです)

⑦⑧ 谷崎は魚崎町横屋で二度引越しています。年譜には「昭和七年二月兵庫県武庫郡魚崎町横屋川井五五〇番地へ転居。さらに翌月横屋西田五五四番地へ転居」と記載されています。しかし、私の調べでは、この二軒は数十メートルしか離れていず、しかも昭和六年前後に完了した区画整理まではどちらも横屋西田で、区画整理後は西田が消え横屋川井に変更されているはずで、その点は谷崎自身もその後の文献もすべて誤っていると思っています。その近くに今も住む元家主小山さんの家族のお話により、潤一郎、丁未子夫妻は、最初昭和七年二月から三月に、小山さんの貸家に又借りか間借りをした後すぐ一軒おいて東隣りの、これも小山さんの貸家を借りたのですが、その間の一軒も小山さんの貸家で根津家が相前後して夙川から引越して来ていて谷崎家と隣合わせになったわけです。

「倚松庵十首」から

魚崎なる根津家の隣に住みける頃

うつりきてと、せになりぬ難波津の何に引かる、われにかあるらん

けふよりはまつのかかげをた、たのむみはしたくさのよもきなりけり

谷崎はこの借家のことを「半袖ものがたり」に詳しく描いていますが、夏の西日がさし込んで暑いので半袖をよく着たと書いています。この家で根津松子夫人に「お慕い申しております。どのような犠牲を払っても貴女様を仕合せに致します」とはっきり愛情を告白しました。やがて根津家は家運がますます傾き、青木の海岸にある根津商店の海の家へ移って行き、谷崎と根津松子夫人とは、手紙をやり取りしたり、青木のゴルフ場(今の魚崎中学)で星空を眺めながら話し合ったりしたといえます。

一方、谷崎は丁未子夫人との離別に向けて動き、遂に七年十一月、丁未子夫人は一人、家を出て知人の妹尾夫妻宅に時折身を寄せ、谷崎は翌月初めに横屋の家を引払って、本山村北畑の方へ移り、二人は別居状態になります。

現在、谷崎、根津両家が借りていた家は残っておらず、小山ハイツ、小山第二ハイツという

積水ハウスのアパート二棟が建っています。住居表示でいいますと、魚崎北町四丁目六一一が根津家跡、同じく六一三が谷崎家跡です。

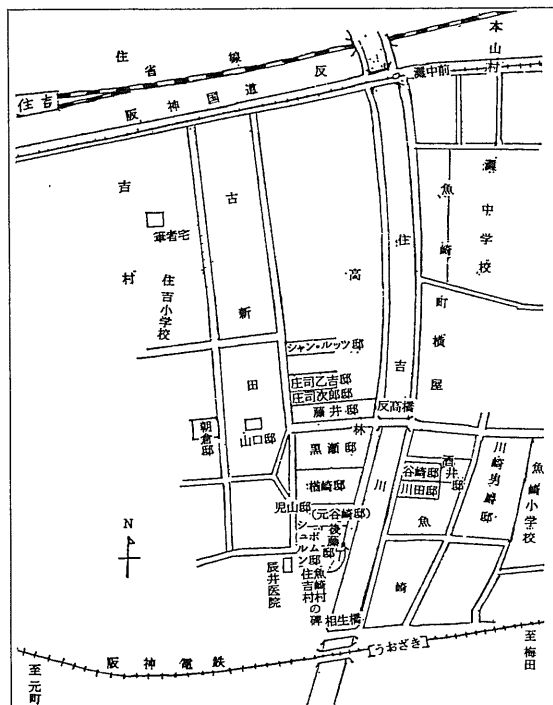
⑨ ⑩ 次に移った北畑の家は、本山村北畑字天王通り五四七番地の二にある井谷氏の貸家で現在もこの家は外観も間取り、内装とも当時と余り変らぬ姿で残っています。今本山北町五丁目十一・一二六となっています。

翌八年五月になると、丁未子夫人は阪急御影近くへ完全に別居し、事実上の協議離婚した形になりました。丁未子夫人は実に気の毒な役回りだったとしか言いようがありません。

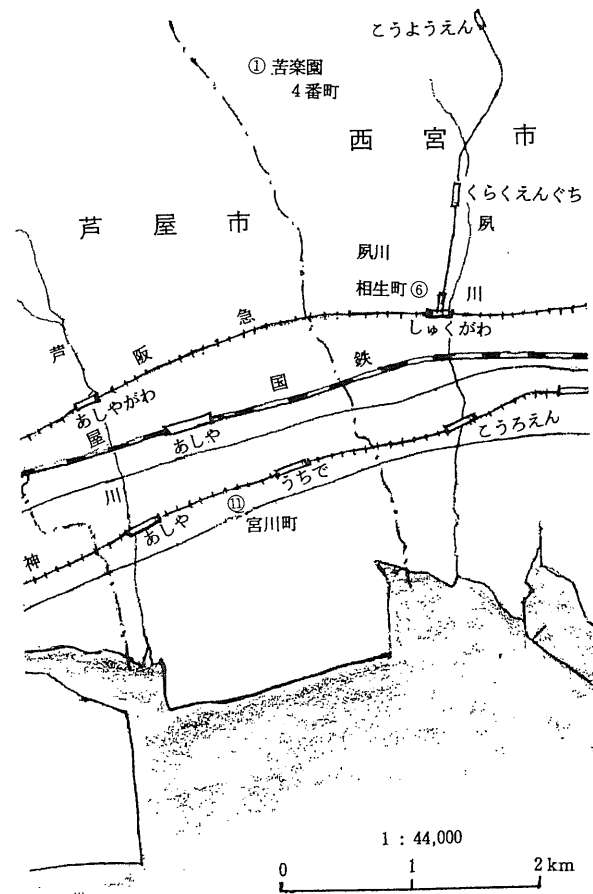
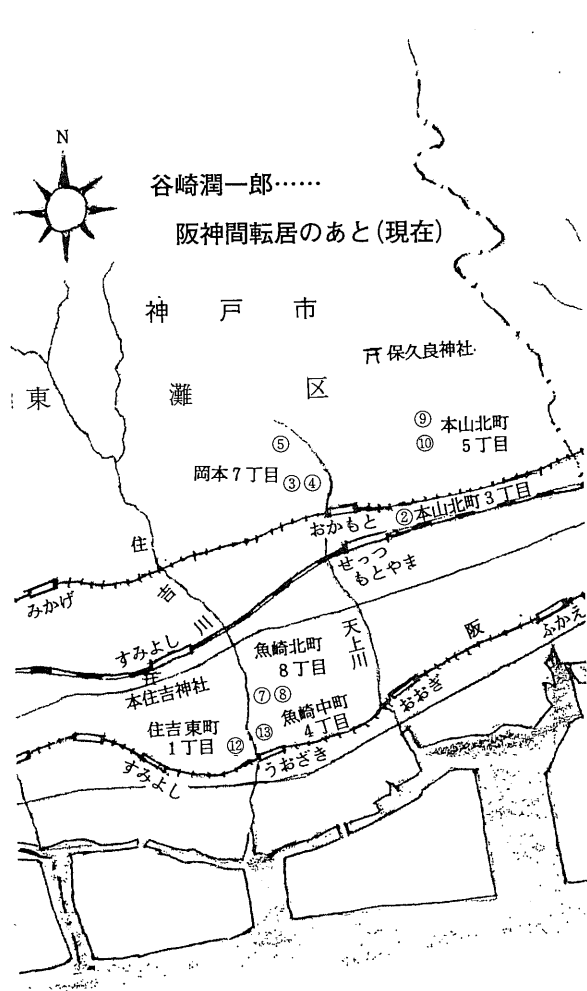
一方、谷崎は「春琴抄」を執筆しますが、作中の春琴と佐助との関係を、松子夫人との間柄に近づけて、イメージをダブらせようとしてきました。その具体的な現れが松子夫人への手紙を「順市」という奉公人らしい名前で書き始めたことといえます。また谷崎の作品には、初期からの特徴である「母恋い」に加え高貴な女性への拝跪の思想が表れてきています。

昭和八年七月には同じ家主の所有する南向いの借家に移りました。前の家より新しい家で、谷崎も気に入っていました。その頃、松子夫人が時折訪ねて来て、二階の一と間に閉じ籠って逢っていました。当時の番地は北畑西ノ町四四八番地です。戦後、井谷家の手を離れてこわさ

れ、現在三軒の新築家屋が建っていて、本山北町五丁目十番二四、二五、二六号に当たります。(続きは次回)



住吉反高林と魚崎の家周辺(戦時中)
(市居義彬著「谷崎潤一郎の阪神時代」より)



(市居義彬著「谷崎潤一郎の阪神時代」より)

谷崎潤一郎の阪神間転居(後編)

西宮ロータリークラブ例会 一九八二・九・二二

⑪ 昭和九年三月十四日、谷崎は打出の家、すなわち武庫郡精道村打出下宮塚十六番地に転居しました。阪神打出駅から西へ宮川を渡って五十メートルほどの所です。この家は少し前に嫁いで近くに住む妹すえが捜してくれたのです。家主は詩人の富田碎花先生の義兄田島房太郎氏で、隣りに富田先生も住んでいながら、標札が谷崎でなく「水野」——これは松子夫人の親戚の名前——と出ているために、長い間隣りに谷崎が借りて住んでいたとは気付かなかつたと、富田先生は話しておられました。富田先生はこの家の焼跡に戦後家を建てて住んでおられます。今年九十二歳で耳が遠いので筆談を交えて話をしました。

この家へ来てから谷崎は根津松子夫人と同棲を始め、松子夫人は旧姓森田に復帰しました。七月に入ってから丁未子夫人との形式上の結婚届が出され、翌十年一月には正式の離婚手續が完了しました。一般の常識とはかけ離れた一種の通過儀礼といえましょう。その後すぐこの打出の家において、森田松子との結婚式が挙げられました。谷崎潤一郎数え年五十歳、松子夫人

三十三歳でした。古式にのっとって、燭台の灯し火に映えた金屏風を引きまわし、木場弁護士夫妻が媒酌を務め、松子の妹二人と松子の友人夫妻だけが席に連なつたといひます。結婚してから谷崎は昔からの親しい友人が新家庭の雰囲気をごわすのを恐れて、来訪されるのを好まぬようになりました。また、この頃が谷崎にとって財政的に最も窮迫した時代だったようです。この頃作られたと思われる歌に、

家計のままならぬを思て

よき人とよき日を送る今ながら　よきこと二つなき世なる哉
というのがあります。

この打出の家でも自分は門の脇の書生部屋のような中二階の建物で執筆し、母屋の方は松子夫人やその妹たちに使わせていました。食事も自分は後から食べるといふような徹底ぶりでした。昭和十年九月頃から「源氏物語」の現代語訳に取組み始め、他には「猫と庄造と二人のそんな」くらいしか書いていません。谷崎は猫が大好きで、どの家でも沢山の猫や犬を飼っていました。十一年頃に近所が何かと騒々しくなつたのに音をあげてその年の十一月住吉反高林へ転居します。

その後、打出の家は母屋は戦災で消失しましたが、富田先生が戦後この焼跡に家を建てて住んでおられ、門の脇の中二階の建物は今も残っていて富田先生の書庫となっています。庭の木や石も昔の面影を残しています。現在の住居表示では芦屋市宮川町四番十二号です。

⑫ 昭和十一年十一月、谷崎とその家族は、住吉村反高林一八七六番地の二〇三、後藤さんの家に引越しました。後藤さんというのは主人がレノールというベルギー出身の人ですがすでに亡くなっており、奥さんが後藤姓で、長男の後藤鞆雄氏は関学時代、極東オリンピック代表選手にも選ばれたサッカーの名手で「ゴットン」の愛称で親しまれていましたが、六年前に亡くなりました。その後藤さんはこの辺り一帯に広大な屋敷を持っていましたが、次々売ったり貸したりしていたのです。

この家は阪神電車の魚崎駅から住吉川西岸を北へ少し上った所にあり、百九十坪ほどの屋敷は松林に囲まれて「倚松庵」の名前にピッタリ感じです。谷崎は家主の了解を得て、裏口の方に書斎用の簡素な離れを建てました。この家で谷崎が文字通り「源氏に起き源氏に寝る」日々を送って、遂に昭和十二年九月に三年の歳月を要した源氏物語の現代語訳も三千三百九十一枚という膨大な原稿となってようやく脱稿しました。刊行は十六年七月です。

次いで、十月頃から「細雪」の執筆にとりかかり、翌十七年三月から、熱海に滞在して「細雪」の執筆に専念します。この作品は昭和十一年の秋に始まり、十六年の春雪子すなわち松子夫人の次の妹、重子の結婚を以て終る長編で、主人公貞之助、すなわち潤一郎の自宅は芦屋川の西に設定してありますが、小説には反高林の家の周辺や、当時起った出来事や会話などが盛んに現われて、作家の小田実が「『細雪』は全体として一つの歴史だ」とっています。

「細雪」の中の巻で、昭和十三年七月の阪神大水害の場面が詳しく書き込まれています。それは翌日、谷崎が「こいさん」信子の主人となった嶋川信一氏の案内で被災地を回って取材したものです。この「細雪」の中で八馬会員が甲南中学生として、水害で立往生の列車内に登場されているそうです。

なお嶋川信一氏をご存知の方もありますが、ゴルフのレッスンプロの草分けですが、去る八月十一日に急逝されました。この阪神大水害のことを書物や新聞などで「関西風水害」と書いていることが多いのですが、これは誤りで、調べてみますと風速は四〜五メートルしかなかったのです。

山津波引きたるあとに夜は更けて ことなし顔に鳴く蛙かわずかな

また、多勢の女中が登場する愉快な小説「台所太平記」の前半の部分は、この家が舞台で、実際にいつも五〜六人もの女中がいたようです。古参の女中で「お春どん」と呼ばれていた久保一枝さんは現在、京都大学の前の書店「春琴堂」のおかみさんです。

昭和十八年の秋、家主の後藤さんの事情で、この家が売られることになり、谷崎に買うだけのもたまった金がなく住吉川の向う岸に住む児山破魔吾氏が買取りました。その児山氏が住んでいた酒井さんの貸家を谷崎が借りることになって、ちょうど家を交換する形で、十月から十一月にかけて、少しずつ荷物をお互いに運んで引越しました。転居癖のあった谷崎にしては珍しく反高林の家に丸七年も住んでいたことになるわけで、家主の事情さえ無ければ、もっと長く住んでいたかったというようなことを後に書いています。しかし、谷崎が気に入っていた庭——芝生や花壇や池があり梅壇、青桐が茂っていた庭も、戦時中に谷崎が立寄って見ると防空壕や畑が作られて荒れていたのでガツカリしたと「疎開日記」に書いているのです。

その頃詠んだ歌

すみよしの松のみどりは変らねど 頼みし蔭はつゆしげくして

現在この家の母屋の方は児山悠輔氏宅になっていて東灘区住吉東町一丁目七番三五号です。

外観は日本風でも、内部はどこことなく西洋趣味が感じられる家で、応接間に入るドアにはステンドグラスがはめ込まれていますし、応接間と食堂との間には「細雪」の通り、木の三枚戸が今も健在です。応接間の暖炉は当時使われていましたが、児山家が買取ってから煙突を取って暖炉は使わなくなっています。応接間と食堂から庭に出るところには「細雪」にあるようにテラスが一段高く作られています。

次に離れの方は、戦後六年間ほど古賀さんという方が住んでおられた後、児山破魔吾夫妻の隠居所となって増築し、現在は未亡人が一人住んでおられます。母屋との間にはブロック塀が作られ、住居表示も住吉東町一丁目七番八号と、母屋とは別個になっています。この離れに参りますと、中二階への階段の上り口の壁に「書斎」と墨で書かれた字がありまして、児山さんは谷崎さんの直筆ですといわれており、新聞や書物にもそう書かれています。その字を写真に撮って松子未亡人に見せた人があって、未亡人は「たった二文字では谷崎の字かどうか判りません」といっています。古賀さんに私が聞いたところ、「私が書くわけもないし、私がいっぱい気が付かなかった」という話で誰が書いた字か依然謎です。

この反高林の家には松の木が七〜八本あったのですが、現在四本に減っています。